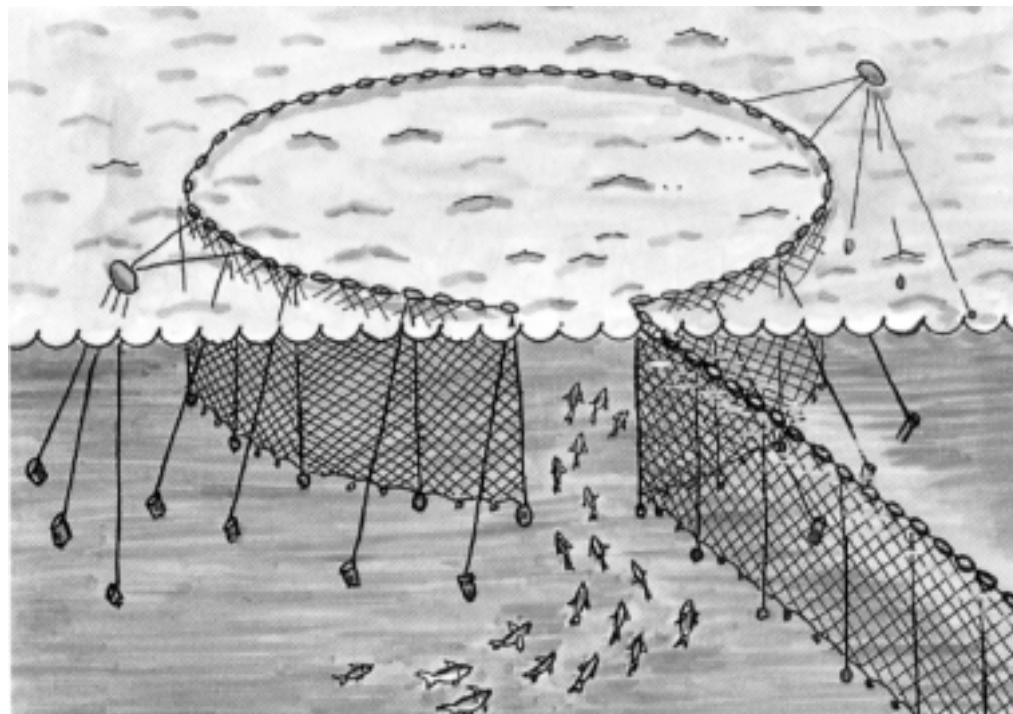


# 「日本の水産業とわたしたちの暮らし」 の単元構想



発表者  
協力者

笠岡市立金浦小学校  
矢掛町立矢掛小学校  
矢掛町立山田小学校  
金光町立金光竹小学校  
鴨方町立六条院小学校  
井原市立出部小学校  
笠岡市立陶山小学校  
笠岡市立真鍋小学校  
笠岡市立吉田小学校  
笠岡市立中央小学校

高橋 伸明  
藤井 直樹  
片山 尚子  
岡本 善弘  
河野由美子  
藤井 義満  
鍋谷 誠  
大岸 巖  
三宅 祐志  
繁地 晋

第5学年 社会科学学習指導案

指導者 笠岡市立金浦小学校 高橋 伸明

1 単元名 日本の水産業とわたしたちのくらし

2 単元目標

我が国の水産業の特色について、収集した資料を活用しながら調べたり情報交換を行ったりすることを通して、携わっている人々の働きや日本の水産業がもつ課題についてつかむ。

3 中心となる内容と支える内容

(中心となる内容)

(支える内容)

日本の水産業を支えている人々は、自然条件や伝統的な漁法を生かしたり、自然環境を守ったりしながら、漁獲量を上げている。

- ・わたしたちの町金浦では、昔はとても水産業が盛んだったが、干拓工事や水質の悪化などの理由で、すべての漁業従事者が廃業した。
- ・日本は、漁獲高が多いだけでなく、水産物の消費量・輸入量も世界の水産国である。
- ・沿岸・沖合漁業を行っている人々は、自然環境に恵まれたよい漁場で、魚の習性に合った色々な漁法を行い、漁獲高を上げている。
- ・遠洋漁業を行っている人々は、200海里漁業水域による様々な制限や、きびしい気候・長期間の航海などの厳しい条件の中、世界中の漁場で漁を行っている。
- ・育てる漁業を行っている人々は、大きく育てて出荷する養殖業だけでなく、海へ放流するための栽培漁業も盛んに行われるようになるなど、水産資源の確保に取り組んでいる。
- ・魚のすみかとなる人工魚礁を置いたり、植林活動を漁師さん達が行ったりするなど、多くの人々が魚が住みやすい環境をつくるために様々な努力を行っている。

4 単元の構想表

次時	子どもの活動	とらえる内容	意識の方向
1次 1時	・30年前の金浦漁港と今の金浦の様子とを写真で比較しながら、水産業で栄えたかつての金浦に関心もち、携わっていた方へのインタビュー活動を行う。	・これは、どこを写した写真だろう。 ・船がたくさんとまっているし、網のようなものがあちこちに干してある。 ・これが金浦の様子だとは思わなかった。 ・昔は、水産業が盛んだった。	・なぜ水産業がなくなったのだろう。 ・昔の様子を調べてみたい。
2時	・廃業した金浦と日本の水産業や日本人の	・岡山県の中でも指折りの水産業の町だった。 ・魚市場では毎日せりが行われていたり、漁船が3百隻もあつたりして、すごくさかんだった。 ・特にイカやワタリガニなどを「まきあみ漁」でたくさん獲っていた。 ・笠岡湾干拓の工事が進んだり水質が悪くなったりしたので、金浦の水産業はおとろえていった。 ・金浦の水産業はなくなったけど、日本中にはまだ3千力所ほどの漁港や28万隻ほどの漁船がある。 ・色々な種類のものが、水揚げされている。	・なくなってしまっただけで残念だな。
3時			

食生活の様子を表すグラフなどを関連付けながら、現状について問題をもつ。

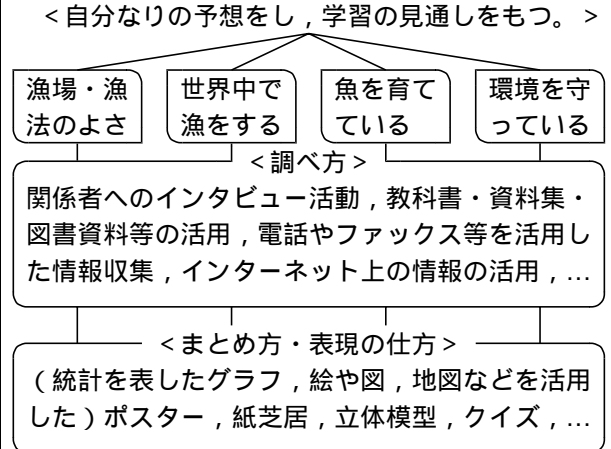
- ・日本は、魚・貝類の消費量が世界一の国だ。
- ・水産物の輸入も世界で一番多い国になっている。
- ・減ってはきているけど、今でも世界で第3位の漁かく量国だ。

・笠岡の海のように、水産業ができなくなるような困った問題はないのかな。

日本の漁かく量がとても多いのはなぜだろう。

2次  
1  
3

・漁獲量が多いわけを、自分の予想に基づいて調べる。



4時

・ポスターセッションによる発表会を行い調べたことについての情報交換を行う。

- ・自然環境に恵まれたよい漁場で、人々は魚の習性に合った色々な漁法を行い漁獲高を上げている。
- ・200海里漁業水域による様々な制限や、きびしい気候・長期間の航海などの悪条件の中、世界中の漁場で漁を行っている。
- ・大きく育てて出荷する養殖業だけでなく、海へ放流するための栽培漁業も盛んに行われるようになるなど、水産資源の確保に取り組んでいる。
- ・魚のすみかとなる人工魚礁を置いたり、植林活動を漁師さんが行ったりするなど、魚が住みやすい環境をつくるために様々な努力が行われている。

・水産業に携わる人は、漁かく量を上げるためにいろいろな工夫や努力をしているな。  
・水産資源を守ることを、どちらも大切にしなければならない。

3次  
1  
2

・未来の水産業予想図をかき日本の水産業の将来について自分の考えをもつ。

- ・育てる漁業をさらに盛んにしていきたい。
- ・魚が住みやすいような水質や海底をもった海をつくっていきたい。
- ・人と魚とが親しめるような海岸や施設をつくりたい。
- ・水産業を盛んにしていくために、後継者を育てる学校をつくりたい。
- ・笠岡の海でも、もう一度水産業を盛んにしたい。

・日本の水産業が、これからも盛んになっていくといいな。  
・私にできることは何かな。

5 支援の立場

(1) 対象となる「人間」の選定

金浦で漁業を行っていた酒井さん

第一次で、かつて漁業が盛んだった金浦の様子をとらえるために、インタビュー活動を行う。酒井さんは、毎年行う「子どもひったか集会」で、地域の伝統行事「ヒッタカ」に関するお話をいただいているなど、子どもたちにとってなじみ深い方である。今までとは違った「漁業」のお話が聞ける、ということも、感動をもって情報に接することができる要因の一つではないか、と考えられる。

遠洋漁業に携わっていた笠原さん

「世界中で漁をしているから漁かく量が多いのだろう。」と予想した子どもが、インタビューをさせていただく。笠原さんは、5年前まで遠洋漁業母船の機関士として働かれていた。長年にわたって様々な苦労や努力を積んで来られたその経験を、生々しく語っていただければ、子どもたちにとっての未知の事象が、より具体的に感動をもってとらえられるのではないかと想定している。

(2) 「人間」とかかわる活動の工夫

問題をもつ活動の工夫

導入において、かつて栄えた金浦漁港の様子を取り上げ、インタビューなどを通して、水産業に対する興味・関心を高めるような活動を展開する。学区内のことでありながら、多くの子どもにとっては未知となっている事象を取り上げることによって、水産業をより身近な環境の中で考えたり、地域社会を今までとは違った観点で見つめたりする手だてにもなると考えている。さらに、日本の水産業の現状について資料などを通して知る活動を合わせて行うことにより、「日本の漁かく量がとても多いのはなぜだろう。」という問題意識をもつようになると思われる。

一人一人の追究を生かす活動の工夫

第二次の追究活動では、学習問題に対する予想別に複線型の学習を行う。子どもが、何を調べるためにどんな資料や情報を必要としているかということのを的確にとらえながら、様々な支援をしていく。また、電話やファックスを使って積極的に情報収集ができるように、調べる手段に応じた「インタビューカード」を用意し、子どもが自分の意志でそれらを活用できるような場を、教室内に常設しておく。これらによって、一人一人の主體的な追究活動を保証していきたい。

学び合いで高める活動の工夫

第二次では、個別学習・グループ学習による追究を展開するが、お互いの調べたことを発表する場面では、ポスターセッションを行う。短時間に多様な情報交換ができる、少人数単位で発表するのでわかりやすい、などのよさを生かしていきたい。また、異なった追究内容に触れることを通して、多面的な見方や考え方を構築する手だてにもなると考えられる。

(3) 新たにはたらきかけていく場の位置付け

未来の水産業予想図をかく活動では、「水産資源の保護」と「国民の食生活を支える水産業の存続」という大きな課題について子どもなりに展望をもって考えたり、改善された自然環境の様子や工夫された漁業施設などのイメージを具体化して描いたりするものと思われる。この活動によって、調べてきた事象に対する見方や考え方を深めたり、将来の水産業に対する興味・関心をいっそう高めたりすることができるのではないかと考えられている。さらに、製作した水産業予想図を校内に掲示したり水産関係の行政機関へ送ったりすることによって、学習によって培われた情報を発信したり、水産業を守る国民の一人としての自覚を高めたりすることができる、とも考えている。

6 本時(第2次 第4時)

指導者 高橋 伸明  
場所 金浦小学校体育館

目標

日本の漁獲量が多いわけについて、各自の予想を基に追究してきた内容を、ポスターセッション形式の発表会で情報交換することによって、日本の水産業の特色をより多面的な見方とらえることができるようにする。

ねらい	日本の漁獲量が多いわけについて、各自の予想を基に追究してきた内容を、ポスターセッション形式の発表会で情報交換することによって、日本の水産業の特色をより多面的な見方とらえることができるようにする。	
学 習 活 動	教 師 の 支 援	現れてくる子どもの姿
<p>1. ポスターセッションによる発表会を行い、情報交換をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・漁場や漁法のよさを取り上げた発表</li> <li>・漁場が世界中に広がっていることを取り上げた発表</li> <li>・育てる漁業についての発表</li> <li>・魚の住みやすい環境づくりについての発表</li> </ul> <p>2. 日本の水産業のよさなどについて話し合う。</p> <p>3. 本時の学習を振り返り、次時の学習について見通しをもつ。</p>	<p>日本の漁かく量がとても多いのはなぜだろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・より多様な事象に触れたり、どの視点から調べた内容の発表も聞いたりできるように、あらかじめ発表する担当者や聞いて回る順番などを決めておくようにしたい。</li> <li>・自分が調べた事象と比較をしたり、驚いたこと・初めて知ったことなどに気を付けたりしながら発表を聞くようにし、視点を明確にしてポスターセッションに臨めるようにしたい。</li> <li>・子どもの発表している場へ同席し、より内容が深まるような質問を投げかけたり補足説明を促したりしながら、わかりやすい発表ができるように支援していきたい。</li> <li>・自分が追究した内容以外の事象から、初めて知ったことや驚いたことなどを発言するようにし、日本の水産業がもつ「よさ」の多様性について理解できるようにしたい。</li> <li>・自分が追究した事象と他の事象とを関連付けて説明できた子どもを称揚し、より深まった見方や考え方をしていくことの大切さを、促していきたい。</li> <li>・「学び方振り返りカード」へ記入をすることによって、自分自身の学び方を評価したり、他の子どもの学び方を取り入れようとしたりすることに結びつけていきたい。</li> <li>・将来の水産業があるべき姿について数名の考えを聞き、次時の学習内容についての見通しがもてるようにしたい。</li> </ul>	<p>「いろいろな人が、魚かく量を高めるために努力しているんだ。」というようなつぶやきが見られる。</p> <p>「みんな同じような願いや思いで取り組んでいるんだ。」というような発言が見られる。</p>







8 反省と今後の課題

(1) 対象となる「人間」の選定について

この実践を通して、子どもは多くの方々の働きや水産業に注いでおられる思いに触れる機会をもつことができた。それらは、子どもの社会的なものの見方・考え方を広げていく意味で、大変効果的な場となったように感じている。

前述したお二人の方々は、共に金浦小学校区の人材である。別の機会でも接することが多い酒井さんに関しては、まずは「おじさんが昔、漁師さんだったなんて知らなかった。」という驚きに始まった。そして、漁業が盛んだった当時の様子を楽しそうに、熱心に語ってくださる様子から、「金浦の漁業はすごかったんだな。漁師の人たちも、知恵を働かせてたくさん魚をとっていたことに感心した。」などという「地域」に対する新たな見方を獲得し、水産業への興味・関心を高めた子どもも増えた。

遠洋漁業に携わっておられた笠原さんからは、「日本にいたら、高級品としてめったに口にできないようなカニや魚が、当時は船に積みきれないほどとれていた。」「ベーリング海で丸2日間、暴風雨にさらされて立ち往生したときには、生きた心地がしなかった。」などという、予想を超える大きなスケールの話や苦労話も数多く聞かせていただいた。そして、今遠洋漁業がほとんど行われていない現状を残念に思い、笠原さんのお話を基にした「がんばれ！日本の遠洋漁業」というテーマの劇を、ペープサートで発表したグループも見られた。笠原さんの遠洋漁業に対する思い・願いが、多くの子どもたちの心に印象深く残り、見方・考え方を深めていく機会を与えたように感じた。

その他にも子どもたちは、電話やファックスによる取材で、多くの方々の働きに接した。漁港に関する質問に答えてくださった「水産庁漁港部計画課」の横田さん、漁法に関する資料を多数提供してくださった「水産工学研究所」の澤田さん、「岡山県水産試験場栽培漁業センター」の福田さん、良質のカキを養殖するために植林事業を行っている「広島県漁連」の方々…。色々な立場の人々が、今日も日本の水産業をいっしょけんめいに支えてくださっているという事実を、体験的に学び取ることができたように感じている。

なお今後は、複線型の学習活動と「人間」の選定のあり方について、研究を深めていく必要があるように思われる。子どもの活動が広がれば広がるだけ、一人一人の「人間」に対する追究活動の質的な高まりも期待できる、とは言い切れない。子どもが、その人物の生きざまにまで深く入り込んでいけるような「感動」を得るためには、「何を」「どんな場面で」複線化するかという、学習過程のあり方にもかかわる問題を明らかにして、実践していく必要があると痛感した。

(2) 「人間」とかかわる活動の工夫について

問題をもつ活動の工夫について

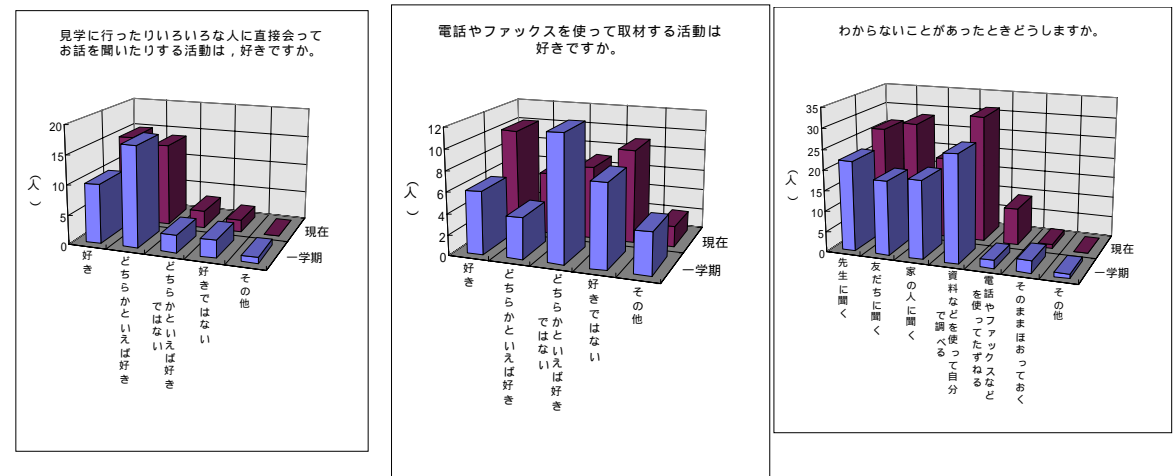
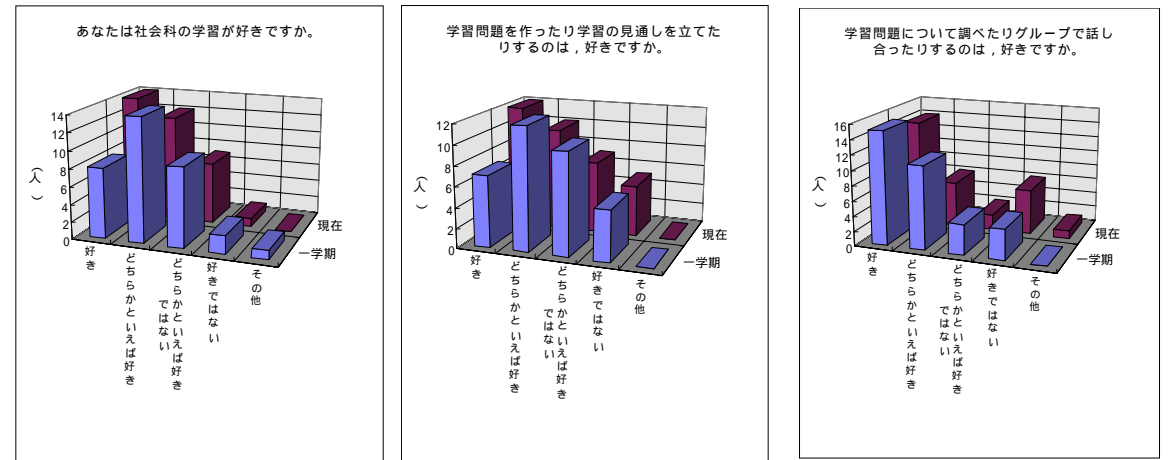
自分たちの住んでいる地域の歴史的事実を導入で取り扱うことは、一見、単元構想の中では何のつながりもなく、唐突であるようにも当初は感じられた。しかし、8(1)でも触れたように、水産業への興味関心を高める上で、これほど有効な導入はなかったと考えている。また、実際に携わっていた人にインタビューをするという「体験的な活動」を取り入れたことも、一人一人の子どもが学習問題をつかむ上で役立った。

単元や教材の性質にもよるが、より「直接体験」に近い活動がこの場面を取り入れられれば、自分とのかかわりを通して問題意識をもつことができるので、よりいっそう有効なのではないかと考えている。

一人一人の追究を生かす活動の工夫について

自分なりのめあてや見通しをもって、自分の好みやよさを発揮しながら追究活動に取り組む「学習活動の複線化」を問題解決的な学習過程の中へ位置づけたことは、子どもの学習意欲や関心を高めたり、主体的に学習に取り組んだりする上で、大変効果的であったと考える。アンケート結果～を見ると、若干の逆転現象はあるが、どの項目においても一学期に行ったアンケート結果よりも「好き」と考えている子どもの数が増えてきている。～はある意味で体験的な活動と位置づけることができるが、自分で見通しをもち実際に体験することを通して、体験に裏付けられた自信と次回の活動への意欲とが生まれ、社会科の学習に、より意欲的に取り組むことができるようになった子どもが増えてきたものと見受けられる。さらに～を見ると、調べる方法の見通しをもつことが容易にできるようになった子どもも少しずつ増えてきている、ということが言える。問題解決的な学習過程の中へ、主体的に多様な活動を取り入れていくことができるような子どもを、さらに育てていきたい。

ただし、いわゆる「子どもの学習技能」を高めることなくして、意欲的な学習活動の持続は望めない。複線型の学習活動を展開することによって、かえって活動意欲が低下しているように思われる子どもがいることも事実である。それぞれの子どものに応じた支援のあり方がなおざりにされることなく、学習過程の工夫に取り組まなければならないと、痛感している。



学び合いで高める活動の工夫について

情報交換する手段として「ポスターセッション」を取り入れたことは、調べる - まとめる - 発表する - 他の発表を聞くという、一連の活動を通した子どもたちの学習意欲を生み出したように感じている。

ポスターセッションが、子どもたちから受け入れられやすい発表手段であるという理由を、アンケートの回答用紙の中に求めてみた。「ポスターセッションで発表することが好きな理由」として挙げているのは、

「多くの人前で話すのははずかしいけど、ポスターセッションは少ない人数の前だからよい。」

「みんなに私の説明がわかってもらえた、とわかる。」

「ふつうの発表より楽しい。」

「友だちと話をしているような感覚で発表できる。」

「みんながしんげんに聞いてくれる。」

「色々なものを使って説明できるので、やりやすい。」

など、一斉授業の発表では見出しにくい「特徴」や「よさ」を感じているものが多い。また反対に、「友だちが発表するのを聞くことが好きな理由」として挙げていることも、

「色々なものを使って説明してくれるので楽しい・わかりやすい。」

「自分が調べていないことを聞ける。」

「どのような発表になるか、きたいがもてる。」

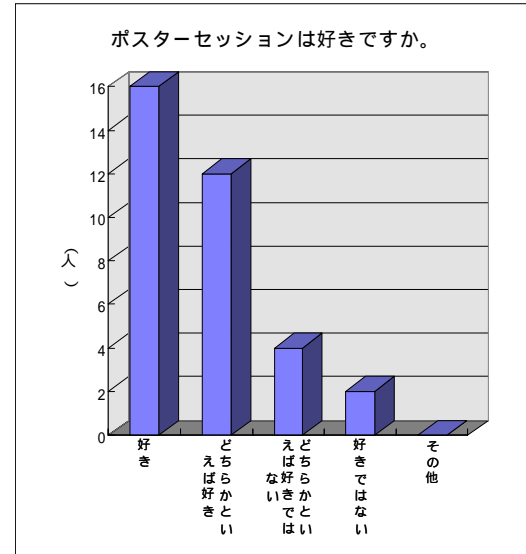
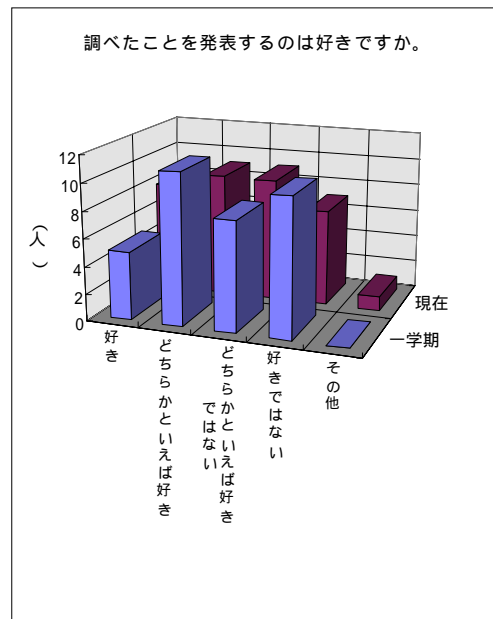
「とても近くにいけないので、よく聞こえる。」

「ふだん発表が苦手な人でも質問しやすい。」

「聞くばかりじゃないので、たいくつしない。」

など、ポスターセッションのよさを的確に感じ取った上での感想であった。「調べたことをただ発表するのが好き」と答えた子どもの数よりもポスターセッションを好む子どもの数が圧倒的に多いのは、当然の結果と言えるかもしれない。

子どもたちの表現力を育てたり、学習意欲を高めたりするために効果的なポスターセッションであるが、ともすると膨大な準備時間が必要となり、学習計画を大きく変更せざるを得なくなる場面に出くわす。自分の学び方のよさを知り、見通しをもって学習が進められる子どもを育てることも、こうした活動をスムーズに展開するために必要なことなのではないか、と考えている。



(3) 新たにはたらきかけていく場の位置付けについて

未来の水産業予想図をかく活動は、アンケート結果を見ても明らかなように、多くの子どもたちが楽しみながら展開していった。いわゆる絵画として見れば、とても稚拙なものばかりであるが、それぞれの子どもの単元を通して追究してきた内容が、そのまま表現されている予想図が多かった。したがって、図に盛り込まれている事象は実に個性的で、かつ、曲がりなりにも学んだことに基づいているものがほとんどであった。

子どもたちは、こうしてかいた予想図を校内へ掲示することによって、他学年の子どもにも水産業の未来について考えてもらおうと提案した。と同時に、大人の人へも見てもらいたいと言い出した。何名かの予想図を、お世話になった水産庁の方に送り、見ていただいたが、「みなさんのアイディアに感心しました。私たちは、未来の漁港について考える仕事もしていますが、みなさんの考えてくれたことも参考にして、これからもがんばっていきます。…」などというファックスの返信を後日いただくことができた。ある意味で、子どもたちの学習は外部の方によって評価されたことになる。そしてそれは、子どもたちの満足感を生み、ひいては社会的なものの見方や考え方の高まりにつながる「社会への関心」を形成することにもつながるものと考えられる。



インターネットに接続できる環境が学校現場に普及していくと、学習したことを各学校が発信し、それを学校外の人が見て反応を返す、などという状況が、ごく自然に生まれてくる。例えばこうした学習活動を、インターネットを利用するための手段として考えるのではなく、子どもの社会的なものの方・考え方を育成するための重要な手だてとして位置付けることができれば、こうした活動の教育的意義も、より深まっていくと考えられる。

今回、「未来予想図を大人の人に見てもらおう。」という子どもの発想が思わぬ効果を生んだことによって、近い将来における「情報発信的な社会科学習のあり方」について、展望をもつことができたようにも感じた。